

新刊紹介

一一二(二〇六)

論稿を発表してきた。本書はそれらの論稿を纏めたものである。

以下内容を紹介する。第一章と第二章は初等教育に関するもので、そのうち第一章では初等教育の制度改革と運用状況について、第二章では一九二〇年代における初等学校教員の組合運動について検討している。第三章では中学の教育改革の理念と現実について、第四章では大学の教育と研究の体制、さらには大学の政治や社会との関わりについて、第五章では女子教育の発展と指導方針をめぐる論争について、第六章では職業教育運動の展開と、その運動において中心的な役割を果たした黄炎培の動きについてそれぞれ論じている。第七章から第一〇章までは平民教育運動の具体的な動向を地域別、時代別に見ている。第七章は平民教育運動の発生過程と同運動の五四時期における展開について明らかにしている。そして以下の章では晏陽初（第八章）・陶行知（第九章）・梁漱溟（第一〇章）といった各教育家が中心となってそれぞれ河北省・江蘇省・山東省などで推進した平民教育運動の具体的動向について検討している。

筆者がこれほどまでに教育現場の具体的な状況にこだわるのは、単に当時の教育現

熊野 聰著

『ヴァイキングの経済学 略奪・贈

与・交易』
(ヒストリア 013)

山川出版社 一〇〇三・一刊

B6変 一九〇頁 一三〇〇円

よって近代中国の多くの教育家から提唱された「教育救国論」を再評価しようという思いがあるからである。「革命を経ずして、単純に教育的手段によって旧中国を改造しよう」という教育救国論は従来の研究史において、「現実とかけ離れた幻想」であり、ゆえに革命によって克服されるべき対象であるとして否定的に捉えられてきた。しかし小林氏はこうした見方を疑問視し、教育救国論が本当に「現実とかけ離れた幻想」なのかどうかを実証的に解明する必要があると論じる。そして本書の各章においてそれは実行されているのである。

本書は、研究史上「アイスランド人のサガ」として類型化される文芸資料を主な手がかりとしながら、そこに描かれる人物の経済生活に焦点を絞ることで中世アイスランドの社会構造を復元しようと、ミクロ・ストーリアの実践例である。

第一章「ヴァイキングの生涯」では、『エギルのサガ』に描かれるソーロール・クヴェルドウルソンを題材とした中国の近代学制や教育家の思想が教育現場においてどのように展開したのか。それを明らかにする努力は依然としてなされていくべきであろう。今後本書を土台とした研究が次々に登場するのを期待したい。

(戸部 健)
規範」は、「めんどり」と渾名されるソーエ

リルとブルンド・ケティルによる干し草をめぐる争いを主題とする『めんどりソトリルのサガ』を丁寧に読み解く、本書の白眉である。両章では、『ヨーンズボーグ』や『グーラシング』といった十三世紀に編纂された成文法の規定を援用しながら、干し草の買い取り交渉という日常の一風景の中に垣間見られる、特殊アイスランド的な経済構造と名誉観念のような倫理觀を抽出することに努めている。第五章「交渉と強制」では、前章までの考察を深化させるために、『ニヤールのサガ』や『ラックスデーラサガ』から別の事例を検討する。そして終章「ヴァイキング社会と商業」では、「農民」たることを終着点とする「ヴァイキング」の商業への関わり方と彼らの社会における貨幣の役割について、著者独特的の考察がなされている。

以上のような長短六つの章から構成されている本書は、サガ史料の提供する興味深い事例とその歴史史料としての可能性を紹介し、ヴァイキングの農民性を含めたこの先探求されるべきいくつもの論点を提示したという点で意義深い。それを認めた上で二つの大きな問題点を指摘したい。

第一点は史料の問題である。長短四十編弱にのぼる「アイスランド人のサガ」は、確かに十世紀から十一世紀前半を舞台としているが、それが写本化されたのは十三世纪以降である。この史料類型を積極的に活用しているJ・バイヨックやW・I・ミラーらアメリカの歴史人類学者らも、基本的に史料が書き留められた時代の社会状況や心性の反映をそこに見いだしているのである。決して歴史学上「ヴァイキング」と呼ばれる十一世紀以前のスカンディナヴィア人を知るための根本史料としているわけではない。(ただしバイヨックの近著(J. Byock, *Viking Age Iceland*, Harmondsworth 2001)は十一~十三世紀を対象としているにもかかわらず「ヴァイキング時代」と表題している点で問題である)。

第二点は「ヴァイキング」という名辞の指す対象の問題である。著者が用いた史料の多くはアイスランド人を主たる登場人物としており、本書における分析もアイスランドの事例を中心としている。つまり本書は本来であれば「中世盛期アイスランド人の経済学」と銘打つべき内容であるが、著者はほぼ一貫して「北欧」という言葉で一般化を図っている。しかしながら「北欧」という言葉を地域名称として捉えた場合、それはユラン半島からスカンディナヴィア半島にかけての広大かつ多様な自然条件で構成される領域を包摂する地理空間を想定するのが通常である。九世紀にノルウェー出身者による植民がはじまり、王のいない「自由共和国」(ある種の政治イデオロギーを孕んだ用語である)時代を経て、十三世紀後半にノルウェー王国に組み込まれるというきわめて特異な歴史過程を経験した北大西洋の島嶼の事例を、特別の手続きもないまま「北欧」に敷衍し「ヴァイキング」に类型化することが説得的であるとは思えない。以上のような問題点はあるにせよ、本書が中世アイスランド社会の一侧面に深く踏み込み、そこに独自の思索で向き合うユニークな研究であることは間違いない。著者の卒業論文以来の関心が結実する本書は、中世ヨーロッパの地域性や行動規範を考えにあたって、北欧中世史専攻者ならずとも参考するだけの価値をもつ。(小澤 実)